

平安朝における王昭君説話の展開

岡崎 真紀子

序

平安朝において王昭君の説話が広く知られ、また好まれてもいたことは、『源氏物語』絵合巻に、

長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、
ことの思みあるは此度はたてまつらじと選りとどめたまふ。⁽¹⁾

と記すこと一つをとつても明らかであろう。「王昭君」は、「長恨歌」と並んで「おもしろくあはれ」であると、『源氏物語』によつてまづは意識される物語なのであった。これに類する記述は、

王昭君を胡の国へ遣り給へる、楊貴妃を殺させ給へる

(『うつほ物語』国譲下)⁽²⁾

楊貴妃、王昭君、李夫人などいひて、

(『浜松中納言物語』巻三『日本古典文学大系』による)
にも見ることが出来る。王昭君の物語の、当時における愛好のほどが窺えるだろう。また、物語のなかの記述ではあるけれども「王昭

君などやうなる絵」とあることから、王昭君を絵に仕立てたものがあつたことが推定される。王昭君の物語は、絵を伴つて鑑賞されることがあつたと考えてよいだろう。

『和漢朗詠集』には「王昭君」の題を有する。⁽³⁾「王昭君」は朗詠題として確たる位置付けをもつて意識されていた。そして、王昭君の詩句は、好んで愛唱されていたのである。また、「王昭君」という雅楽曲もあつたと伝えるし⁽⁴⁾、『龍吟抄』⁽⁵⁾、王昭君を題にした詩や和歌、説話等も数多く残っている(後述)。文学・絵画・音楽、さまざまな形で折に触れて、平安朝の人々は王昭君に接することがあつたであろう。王昭君に対する愛好は、広く、深いものがあつたのである。

遠く漢の元帝の時代、来朝した胡人への対処として、王昭君は、都から遙か胡国へと遣わされていったのであつた。王昭君に関する文献の歴史は古い。主なものをおげれば、『漢書』(巻九 元帝紀、巻九十四 匈奴伝)、『後漢書』(巻八十九 南匈奴伝)、『西京雜記』、

『世説新語』、『文選』巻二十七「王明君詞」(石季倫)、六朝詩・唐詩のなかにも数多く見られるし、『白氏文集』にも数首がある。

こうした多岐にわたる文献が日本に伝わり、もともと古いところでは、『懷風藻』(釈弁正「與朝主人」)にその影響が見える。⁽⁸⁾

そして、平安朝においてたいへん好まれて、さまざまな形で広く受容されてゆくことになった。そのなかで王昭君の説話は、日本における独自の展開を遂げてゆくことになるのである。

第一章 漢詩における王昭君

『文選』「楽府」(巻二十七)に石季倫「王明君詞」があるように、「王昭君」は楽府題で、六朝詩からはじまって唐詩にも多く「王昭君」詩が作られた。

わが国平安初期、勅撰詩集に載る漢詩を見ると、『文選』などに掲げる楽府題に学び、それをそのまま詩題として取材して詩に作ることが、当時行なわれていたと知られる。『凌雲集』に「王昭君」(滋野貞主)、『文華秀麗集』「楽府」に「王昭君」の奉和詩群五首があり、『経国集』巻十にも「奉試、賦得王昭君」(小野末嗣)がある。次にあげるのは、『文華秀麗集』の一首である。

奉和王昭君

藤是雄

含悲向胡塞

辭龍別長安

馬上關山遠

愁中行路難

脂粉侵霜減

花簪冒雪殘

琵琶多哀怨

何意更爲彈

(『日本古典文学大系』による)

胡国へ向かう王昭君の行路を詠ずる。馬上で愁う王昭君、容貌は風霜に損なわれ、琵琶の音色が哀しい。この詩は、次にあげる初唐董思恭「王昭君」に類似している。

琵琶馬上彈

行路曲中難

漢月正南遠

燕山直北寒

髻鬟風拂散

眉黛雪沾殘

斟酌紅顏盡

何勞鏡裏看

(『楽府詩集』『四部叢刊』所収による)

「馬上」「琵琶」「行路・難」「雪・殘」の語が共通する。藤原是雄の詩は、董思恭の詩に拠り、その表現に倣うものであったようである。このほかにも「含悲向胡塞」は、「含悲向白龍」(東方虬「王昭君」)との類似を指摘することができる。

この二つの詩の比較においてとくに、双方の第五、六句「脂粉侵霜減 花簪冒雪殘」「髻鬟風拂散 眉黛雪沾殘」が似た表現であることに注目したい。その表現について見ると、『文華秀麗集』の「王昭君」詩ほかの

沙漠壞蟬鬢 風霜殘玉顏(御製「王昭君」)

畫眉逢雪壞 裁鬢爲風殘(朝野鹿取「奉和王昭君」)

もその詩句に類似している。また『経国集』にも「青蟲鬢影風吹破、黃月顏粧雪點殘」(小野末嗣「奉試、賦得王昭君」)がみえる。

いずれも風霜・雪に乱れた王昭君の容貌を描く。「風霜(雪)」とは、辺地における風や霜のことで、「塞外無春色、辺城有風霜」(武

陵王妃「明君詞」とあるように、辺地の荒涼とした、まるで春が訪れることがない所であるかのような寒々しい、ありさまを示す語である。漢詩の表現の領域において、王昭君が向かう胡国とは、風雪のはげしい辺塞の地にある、「無春色」の国なのである。

このように『文華秀麗集』の「王昭君」詩には、春なき辺塞へ向かう王昭君の容貌が風霜・雪に損なわれるのを描写する、という表現が、複数の作者によって繰り返して詠まれている。『文華秀麗集』とは、そのほとんどが嵯峨天皇御製に奉じた唱和詩から成る詩集である。「王昭君」詩群も、嵯峨御製をめぐる奉和詩であった。いわば嵯峨天皇をめぐる官人集団の詩作なのである。そこに一つの方角を持った詩風が生まれていたことが、ここから窺えるだろう。

しかしそれは、董思恭詩に近似する詩句であったように、中国詩にそのまま拠った表現の域をでるものではなかった。勅撰詩集における漢詩は、「手あたり次第中国詩の表現詩句をそのまま借用したもの」(小島憲之氏『白詩』以前)、『国語国文』三〇(巻四号)なのである。中国詩の詩句をそのまま借りて潤色し、挿入するのが、当時においては詩に表現するということだったのである。発想は中国詩によって限定されていて、表現内容もそこから一步も出るものではない。そして互いに似通った類型的な詠風である。

従って、そこに表現される「王昭君」も、おのずから、中国詩の模倣であり、型にはまった表現にならざるを得なかったのだと言えよう。

第二章 物語における王昭君

第一節

王昭君をめぐる説話を、やまとことばで記す説話の形で伝えるものも、勿論あった。下って『俊頼髄脳』には、二首の王昭君を題材とする和歌をあげ、その和歌の故事として、王昭君説話が次のように紹介されている。⁽¹⁾

もろこしには、みかどの、人のむすめ召しつづ御覧じて、宮のうちにて、すまなめさせ給ひて、四五百人とゐなみて、いたづらにあれど、ここには、あまり多くつもりにければ、御覧する事もなくてぞ候ひける。それに、えびすのやうなるものの、外の国より、都に参りたる事のありけるに、⁽²⁾いかがすべきと、人々に、さだめさせ給ひけるに「この宮のうちに、いたづらに多く侍る人の、いとしもなからむを、一人給ふべきなり。それらまさる心ざしはあらじ」と、さだめ申しければ、さもと思し召して、みづから御覧じて、その人を、さだめさせ給ふべけれど、人々の多さに、思し召しわづらひて、絵師を召して、「この人々のかた、絵に画きうつして参れ」と、仰せられければ、次第に画きけるに、この人々、えびすの具にならむ事を嘆き思ひて、われもわれもと思うて、おのおの、こがねをとらせ、それならぬものをとらせければ、いとしもなき容貌をも、よく画きなして、持てきたりけるに、王昭君といふ人の、容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて、絵師に、物をも、

心ざさずして、うちまかせて画かせければ、本のかたちのやうには画かで、いとあやしげに、画きて持て参りければ、この人を給ふべきにさだめられぬ。その程になりて、召して御覧じけるに、まことに玉のひかりて、えもいはざりければ、みかど、おどろき思し召して、これを、えびすに給はむ事を、思し召しわづらひて、嘆かせ給ひて、日頃ふる程に、えびす、その人をぞ賜はるべきと聞きて、参りにければ、あらためさだめらるる事もなくて、つひに賜ひにければ、馬にのせて、はるかにゐていにけり。王昭君、嘆き悲しむ事かぎりなし。みかど、恋しさに、思し召しわづらひて、かの王昭君が居たりける所を、御覧じければ、春は柳、風になびき、うぐひす、つれづれにて、軒のしのぶ、隙なくて、いとど、もの哀なる事かぎりなし。

これに続いて二首の歌の解釈に至るといふ運びになっている。

『俊頼髓脳』の掲げる和歌とその解釈については、後述する。
唐土の帝の後宮には多くの女性がいた。あるとき胡国の者がやってきて、その処遇として、後宮の女性を一人胡国の者に与えることになった。女たちの絵を描かせて、それによって遣わす者を選ぶので、胡国行きを免れたい女性たちは、こぞって絵師に賄賂を贈り、肖像を美しく描かせた。ところが王昭君は、自分の美しさをたのみにして賄賂をやらなかったので、絵を醜く描かれてしまい、彼女の胡国行きが決まった。帝は王昭君の美しさを知って嘆いたのであるが、とうとう王昭君は胡国へ遣わされていった。王昭君の嘆きは限りなく、王昭君を喪った帝の哀しみもかぎりなかった。

この『俊頼髓脳』を遡って、既に王昭君の説話を引いているものがあつた。『うつほ物語』内侍督巻である。『うつほ物語』の場合も、王昭君をめぐる話をやまとことばで記しているという点では、『俊頼髓脳』と同じである。しかし、文章の行き方の上でも、また説話の叙述内容においても、『俊頼髓脳』とはまったく異質なものであるようだ。

まず、王昭君説話が引かれるに至るまでの『うつほ物語』内侍督巻の物語は、こうである。相撲の後の管絃をとみに楽しもうという仲忠の誘いに、母（すなわち俊蔭女）は、実は自分が宮中に誘い出すための仲忠の欺きであるとも知らず、ともに参内する。そこで朱雀帝と俊蔭女が対面、かねてより俊蔭女に思いを寄せていた帝は、その思いを語り、俊蔭女に対して俊蔭所伝の琴を演奏するよう所望する。そして、俊蔭女の弾く琴の靈妙なる音色に感じ入った朱雀帝は、ある一つの琴曲の故事として、次のように語りだす。

このめくたちを、昔、もろこしの帝のいくさに敗けたまひぬべかりける時、胡の国の人ありて、そのいくさを鎮めたりける時、天皇、よろこびのきはまりなきによりて、「七の後のなかに、願ひ申さむを」と仰せられて、七人の后を絵に画かせたまひて、胡の国の人を選ばせたまひけるなかに、すぐれたる容貌ありける、そのうちに、天皇おぼす事さかりなりければ、その身の愛をたのみて、「こくばくの国母・夫人のなかに、われ一人こそはすぐれたる徳あれ。さりとて、われを武士にたばんやは」のたのみに、容貌画きならぶる絵師に、六人の国母は千両

のこがねを贈る、すぐれたる国母は、をのが徳のあるをたのみで、贈らざりければ、劣れる六人はいとよく画きおとして、すぐれたる一人をば、いよいよ画きまして、かの胡の国の武士に見するに、「この一人の国母を」と申す時に、天子は言かへずといふものなれば、え否びず、この一人の国母をたまふ時に、国母、胡の国へわたるとて、嘆くこと、…

文中に「王昭君」の名は示されていないが、これは明らかに王昭君説話である。「このめくたち」なる琴曲の故事として語られている背景には、先にあげた「王昭君」の雅楽曲の存在があるだろう(注4参照)。このように、琴・琵琶など音楽に関わる話を物語ることは、当時珍しいことではなかっただろうと思われる。王昭君の話も、そうした語りの一つであったようだ。帝の口から語られる話として王昭君が記されているこの内侍督卷の例は、平安朝において、王昭君説話が、口頭で語る語りという形としても享受されていたことを伝えてくれる。

たしかに、やまとことばを以て記述した説話という表現形態は、『俊頼随脳』も『うつほ物語』も同じである。だが、それぞれの文章の行き方を見ると、両者の相違は大きいと言わねばならない。

一読、説話の分量からして、『俊頼随脳』の方がはるかに多い。おおよそ『俊頼随脳』は話の展開を詳細に語るのに対して、『うつほ物語』は話の捉え方が粗々しいと考えられるのではないか。

例えば、絵師に絵を画かせて胡国に遣わす女性を選ぶところの記述を比較してゆくことにする。

『俊頼随脳』(④)は、胡国への対処についてまず人々が詮議し、女性を胡国に与えるのがよいと帝に進言して、そのうち帝自らが絵師に絵を画かせる命を下した、とする。後宮の女性たちの絵を画かせることに決定するまでが、一つ一つのできごとの段階的な推移として捉えられ、会話を交えつつ、仔細に語られてゆく。

『俊頼随脳』の行文では、女性を選定する手段として絵を画かせることが決まるまでの展開が詳述されているのである。

一方、『うつほ物語』では、こここのところを「七人の后を絵に画かせたまひて」(⑧)と記すのみである。人々が詮議を行うこともなければ、帝の勅言もない。『うつほ物語』の行文では、ただ、女性たちの絵を画かせたのだという、結果としての事実しか語らないのだ。

このような行文には、注意してよい。

これに、中国側の文献の一つ、『西京雜記』を、試みに並置させてみよう。

元帝後宮既多、不得常見。乃使畫工圖形案圖召幸之。諸宮人皆賂畫工。多者十萬、少者亦不減五萬。獨王嬪不肯。遂不得見。匈奴入朝、求美人爲閼氏。於是上案圖、以昭君行。及去召見、貌爲後宮第一。善應對、舉止閑雅。帝悔之。而名籍已定、帝重信於外國。故不復更人。乃窮案其事、畫工皆棄市。籍其家、資皆巨萬。畫工有杜陵毛延壽爲人形、醜好老少、必得其真。安陵陳敞、新豐劉白、鵠寬、並工爲牛馬飛鳥、衆勢人形、好醜不逮延壽。下杜陽望、亦善畫、尤善布色。樊育亦善布色。同日棄

市、京師畫工、於是差稱。⁽¹³⁾

対応する部分は「乃使畫工圖形案圖召幸之」である。『西京雜記』も、後宮の女性の絵を絵師に描かせたのだという事実しか記していない。⁽¹⁴⁾

『うつほ物語』の行文は、『俊賴髓腦』における人々の進言から帝の命令に至るまでの展開を語る行き方よりも、むしろこの『西京雜記』の行文に非常に近いところにある。

結果として起こった事実のみを捉え、骨格となるに必要な事柄だけを積み上げて文章を構築してゆくという傾向は、漢文による叙述に強い。右の『西京雜記』について言えば、「乃使畫工圖形案圖召幸之」につづくのは「諸宮人皆賂畫工」。絵を画かせてそれによって女性を召したという事柄から、叙述は即座に、女性たちは画工に賂賂をやったという事柄へと移ってしまい、その事柄と事柄を繋ぐ、例えば女性たちが賂賂をやった心情的動機といった因果関係は述べられない。

かかる点において、『うつほ物語』の王昭君説話における文章の行き方は、漢文の叙述の性格に近接していると言えるのかもしれない。『うつほ物語』の王昭君説話を見ると、「昔、もろこしの帝の」から「国母、胡の国へわたる」に至るまで、叙述は概して、話の節立てに必要な事実を叙してゆくけれども、その筋立てを繋ぐ、場面場面の描写に乏しい傾向にある。言い換えれば、話の捉え方が粗々しく、やまとことばによって一つの物語の展開を叙述してゆく文章としては、まだ熟さない段階にあると言える。それが、『うつほ物

語』の王昭君説話の文章上の特質であると考えられる。⁽¹⁵⁾ その端的な例が、「七人の后を絵に画かせたまひて」の『俊賴髓腦』との比較において示す性格であった。

翻って、『俊賴髓腦』における王昭君説話の文章を顧みてみよう。先に比較した部分においても、漢文（『西京雜記』）ほか。注18参照）にもなく『うつほ物語』にもない、人々が詮議する場面や、帝が絵を画かせる勅言を下す場面が加わり、詳しく語られていた。また、妃たちが賂賂をやった動機に關しても「この人々、えびすの具にならむ事を嘆き思ひて」と女性たちの心情を描写し、展開が豊かになっている。『俊賴髓腦』の王昭君説話は総じて、『うつほ物語』と比べてはるかにできごとに豊かな描写による肉付けを加え、事柄と事柄を繋ぐ展開に膨らみがある。つまり、『俊賴髓腦』の王昭君説話は、『うつほ物語』との比較で言うならば、はるかに膨らみが加わった叙説の展開を果たした文章なのであるといえるだろう。

第二節

『俊賴髓腦』の王昭君説話と『うつほ物語』のそれとは、説話の叙述内容においても、大きく異なっている。『うつほ物語』に従うと、周知の「王昭君」とは異なる女性、王昭君が現れてくる。

胡人が戦を鎮めてくれた謝礼に、后のうち一人を胡国に与えることになった。「七人の后を絵に画かせ」て、その中から気に入った女性を「胡の国の人へ選ばせ」というので、六人の后は、胡人に選ばれなくてすむよう、絵師に「千両のこがね」を贈り、絵を醜く

画かせた。しかし、「天皇おぼす事さかり」である王昭君は、帝から受ける「身の愛」すなわち「をのが徳のある」⁽¹⁷⁾ことをたのみにして、絵師に賄賂を贈らなかつた。

『うつほ物語』の王昭君は、ならびない帝の寵愛を一身に受ける后である。もちろん「すぐれたる容貌」をもつ、女性としての理想的な在り方を兼ね備えた、まさに「すぐれたる国母」なのだ。

絵師に賄賂を贈らなかつた王昭君は、その結果、もとの美貌以上にますます美しく絵に画かれてしまった。当然それは胡人の目にとまり、王昭君の胡国行きが決定する。

この部分『俊頼髓脳』を見ると、絵を實際に見て選ぶのは帝で、王昭君は「本のかたちのやうには画かで、いとあやしげに」画かれたのだとある。王昭君は、絵を醜く画かれてしまったのだ。『西京雜記』等の王昭君に関する中国側の文獻を見ても、また日本の他の文獻もすべて、『俊頼髓脳』に同じで、王昭君は絵を醜く画かれてしまった、だから胡国に遣わされることになった、という展開が、王昭君説話の通例である。より一層美しく絵に画かれたという理解は、『うつほ物語』だけで、他にはない。⁽¹⁸⁾王昭君説話の筋立てにおける最も重要なところが、『うつほ物語』では、正反對にずらされ、通例から逸脱しているのである。

こうした、『うつほ物語』独自の筋立ては、再び内侍督卷における王昭君説話が引き合いにだされた文脈を想い起こさせよう。

そもそも、朱雀帝が王昭君の説話を語りはじめたのは、帝自身思いを寄せていた俊蔭女が奏でた琴の妙な音に、心を動かされたか

らであつたはずである。その俊蔭女という女性性は、「この北の方をさらに親と思ひわすれて、いづくなりし天女ぞと思ひ居たり。」(内侍督)と子息仲思までもが評する美女。『うつほ物語』作中に登場する数多の女性たちのなかでも「只今の人は、三条の北の方一、藤壺一、宮三こそおはすめれ。」(蔵開上)と、第一の女性として評される、まさに理想の女性、あらまほしき人なのであつた。しかも、夫兼雅からの「一条殿にあからさまにもおはせず、こと御心なし」(俊蔭)というほどの愛を一身に集めた女性として、『うつほ物語』のなかで語られているのである。彼女にひとかたならぬ愛を注ぐ夫兼雅を、王昭君説話の「帝」に擬してみるならば、俊蔭女はその「身の愛」をこうむる理想の女性「すぐれたる国母」王昭君の立場にある。ここで、あの朱雀帝が語った王昭君の説話には、俊蔭女が重ねあわせられていたのではないかとすることに気づくだろう。

事実、説話を語り終えたのち朱雀帝は、「境越えけむ国母に、関いらぬ國王をこそおぼしもおとさざらめ、」⁽¹⁹⁾と言い、俊蔭女の夫兼雅ことを「関ゆるされぬ人」だと語っている。国境の関を越えて行った王昭君に擬えて、俊蔭女は自分にとっては越えられぬ関のあなただの人のだと言ふのだ。朱雀帝は、兼雅が妻として溺愛する女性が他ならぬ俊蔭女であると知つて以来(俊蔭)、俊蔭女に執しつづけ、わが許に召したいと思つていた。その朱雀帝にしてみれば、俊蔭女にひとときの愛情を注ぐ兼雅の存在とは、妻を手放すことなど許さぬ「関」にちがいない。朱雀帝によって、王昭君と俊蔭女は、

まさに重ねあわせられていたのであった。

とするならば、王昭君は絵をますます美しく画かれたのだとする『うつほ物語』独自の説話の理解も、実はそれを語る人、朱雥帝の俊蔭女に寄せる深い思慕の情を反映するものなのだと考えられまいか。恋しい俊蔭女を王昭君に擬えたとき、朱雥帝には、彼女の絵が醜く画かれてしまうというたつた一つの瑕疵すらも許されなかったのだ。

しかしとうとう、のちに朱雥帝によって、俊蔭女は内侍として召されることになる。その後帝は、「今は国母と聞こえてましかし。」(内侍誓)と語っている。俊蔭女は朱雥帝にとってまさに、かの王昭君のごとく「すぐれたる国母」になるべき人だったのである。

再び王昭君説話の叙述に戻ろう。「胡の国」へ遣わされることに決まったのは、こともあろうに最愛の後、王昭君であった。しかし、「天子は言かへずといふものなれば、え否びず」。たとえ帝であらうとも、前言を覆してその決定を拒むことはできない。なぜならそれが天子たる者のとるべき道だからである。これに類似した「天子空言せずといふ事は、なきよなりけり」という文言が、内侍誓巻には既に見えている。⁽¹⁹⁾

このように帝が決定を拒めない理由として天子のあるべき道を持ち出すのは、道義・道徳を重視する立場であるし、また、故事による言辭「天子は言かへず」を格言のごとく引いているのは、教訓的でさえあるだろう。ここの記述は、道徳的かつ教訓的であると言える。

こうした王昭君説話の叙述態度は、『うつほ物語』という物語自身の性格を如実に物語っているだろう。

例えば、俊蔭巻においては「いと賢き孝の子」(のち仲忠)が母に孝養を尽くす姿を語り、『二十四孝』を引くし、「よし、仇は徳をもちてとぞいふなる」(藤原の君)と『論語』の言辭を引く一節もある。(憲問第十四「或曰、以德報怨」) (また「老子」恩始第六十三に「報怨以德」(『新釈漢文大系』)とある)『うつほ物語』には、道徳的な記述が所々にみられるのである。

王昭君説話の叙述は、それを語る登場人物朱雥帝の思いのみならず、説話を引いた『うつほ物語』という物語全体の性格を反映してもあるのだ。とすれば、王昭君が第一の寵愛を受ける理想的な、あらまほしき女性として語られたのも、実は『うつほ物語』全体のめざすところに従った説話解釈であったとも理解されてくる。『うつほ物語』における登場人物は、理想的な人物として描かれていることがある。

あやしく、まだ若くおはする御かたちよりはじめ、しいでたまふことも、あらまほしくものしたまふ哉。(春日詣)

と評されるあて宮が、その典型的な例だろう。王昭君もそうした『うつほ物語』の登場人物としてふさわしい人物像に改められたのだと見ることもできるだろう。

このように、『うつほ物語』の王昭君説話の叙述から浮かび上がってくるのは、説話の語り手の思いであり、また説話を引いた『うつほ物語』自身の性格であった。言い換えれば、『うつほ物語』の物

語の文脈にふさわしくなるように、理想的・道徳的に改変された王昭君説話だったのである。

第三節

『俊頼髓脳』における王昭君は、『うつほ物語』の王昭君のような、第一の寵愛を受ける理想的な女性ではない。

『俊頼髓脳』の王昭君が、絵師に賄賂を贈りなかつたのは、「容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて」であつた。麗しい容貌を頼みにしていた王昭君は、絵を醜く描かれてしまい、胡国に遣わされることになる。その王昭君を、帝は「その程になりて御覧じ」たのだという。

王昭君は、胡国に下されるその時になって、初めて帝に謁見したのである。帝の寵愛など、皆無であつた。『うつほ物語』とは対照的な理解である。

王昭君の玉のような美しさを知つて帝はたいへん驚いたが、致し方ない。『俊頼髓脳』はつづいて次のように記す。

これを、えびすに給はむ事を、思し召しわづらひて、嘆かせ給ひて、日頃ふる程に、えびす、その人をぞ賜はるべきと聞きで、参りにければ、あらためさだめらるる事もなくて、

帝が王昭君を胡人に下賜するまでの間の経過を記す。この箇所は、先にあげた『うつほ物語』の「天子は言愛へず」といふものなれば、えびすに」に対応する記述である。ここで両者を比較すると、『俊頼髓脳』における叙述の性格が端的に浮かび上がってくる。

『うつほ物語』が帝の行動を道徳的な言辭で律してゆくのに對して、『俊頼髓脳』においては、帝は王昭君を譲り渡すことを思い悩み、数日間嘆き暮らす。そして止むを得ず、王昭君を手放したのだ、という。『俊頼髓脳』は、帝の心情にまで深く踏み込んで、叙述を展開させている。

『俊頼髓脳』の王昭君説話の文章は、場面場面の展開に膨らみがある。と先に述べたが、その膨らみの方向性を見るならば、説話のなかの人物の心情に踏み込んだ展開へと傾むいてゆく方向にあると考えられそうである。

ここでさらに、もっとも注目しなければならないのは、説話の末尾に記される、この一節である。

みかど、恋しさに、思し召しわづらひてかの王昭君が居たりける所を、御覧じければ春は柳、風になびき、うぐひす、つれづれにて、軒のしのぶ、隙なくて、いとどの哀なる事かぎりなし。

王昭君を遣わした後の帝の哀しみである。帝は、嘆き哀しんで、恋しさのあまりに、かつて王昭君が居た所に行つてみる。だが、ただ春・秋の景物を眺めるばかりで、王昭君の面影は、もうどこにも見出すことはできなかった。

ところが、このように、王昭君が去つたあとの帝に着目する記述は、『うつほ物語』にはない。それだけではなく、『俊頼髓脳』に先立つ、中国側の王昭君に関する資料においても、これに類する記述は管見によるかぎり、見ることができない。『俊頼髓脳』だけが、

王昭君説話にこの場面を付け加えているのである。これはどういうことだろうか。

説話は、語られるたびに新たな発想が加えられてゆくことが可能であろう。それによって新たな解釈・新たな記述が説話に付されるのである。『俊頼髓腦』は、王昭君が去った後の帝の心情までも推し量り、その心情を説話に加えた結果、末尾にこの記述を付け加えたのではないか。

この付加によって、『俊頼髓腦』の王昭君説話は、去りし王昭君を恋う帝の、あわれな心情を語るところで閉じられることになった。まことにあわれな、物語らしい場面で結末付けられていると言っている。この結末の発想は、「例えば、『伊勢物語』の第四段「月やあらぬ」の段の発想と共通している。別れた女の面影を求めて、思いのあまりに、思い出の地に行ってみるが、女の面影を見出すことはできない」(上野英二先生「長恨歌から源氏物語へ」『国語国文』五〇巻九号)という発想とまさに照応する。すなわち、『俊頼髓腦』が、王昭君と別れた後の帝の哀しみの場面を付け加えていることは、こうした言わば物語的な発想に向かって王昭君説話が膨らんでいったことを意味するのではないか。この物語的発想は、王昭君説話にあっても「当時の宮廷人士の好みに応じた解釈だった」(前掲上野論文)のだから。

王昭君去りし後の帝の心情までも深く掘り下げた結果として、王昭君説話は物語的な展開に傾く方向に増益したことになる。王昭君説話は、より心情に踏み込んだ、平安朝好みの物語らしい物語へ

と、その姿を変容させたのである。

第三章 王昭君の和歌

第一節

王昭君をよめる

懷円法師

見るからに鏡の影のつらきかなくらざりせばくらしや
は

右は、『後拾遺和歌集』巻十七(雑三)⁽²²⁾に収める、「王昭君をよめる」の詞書に三首が連なるうちの一首である。

作者懷円法師は、顯昭『古今集注』に「懷円へ道済ガ息ナリ。号大宮禪師又号大宮平禪師。」(『日本歌学大系』別巻四による)と記されるごとく、歌人源道済の息子であって、叡山の法師であった。大中臣輔親や、頼通時代に活躍した歌人藤原範永との交友が知られ⁽²³⁾、『袋草紙』、顯昭『古今集注』『拾遺抄注』には、良遍法師に対して歌説をめぐる論難を繰り広げた豪快な懷円像が伝承されている。詠歌は『後拾遺集』に三首を残すのみであるけれども、父道済の血を引いたからか、当時においてはなかなかの歌僧であつたらしいと推測される。

この懷円の歌、一説、下句の「かゝらざりせばくらしやは」とは、一体何を言ったものなのか、首を捻らずにはいられないだろう。王昭君になりきって、王昭君の心を詠んだ歌であるらしい。この王昭君は、鏡を見て、何を嘆いているのであろうか。

この歌とならぶ「王昭君をよめる」他の二首は、次の歌である。

赤染衛門
なげきこし道の露にもまさりけりなれにし里を恋ふるなみだは

僧都懷寿

思ひきや古きみやこをたちはなれこの国人にならむものとは
いづれも、胡国に遣わされたあとの王昭君の心情にそのままなり
かわって詠まれた歌である。

『赤染衛門集』では、詞書に「王昭君が胡のくにゝいきつきての
思ひよみてと人のいひしに」(『私家集大成』赤染一による)と記
す。王昭君を和歌に詠むことは、好んで行なわれていたらしい。そ
ういう場面では、王昭君説話の内容を語ることも行なわれていただ
ろう。その説話の登場人物の心情を推し量って、登場人物の心を詠
み込んでゆくところに、和歌は生まれるのであった。

懷円の「見るからに」の歌が難解である所以は、二度重なる「か
ゝる」という指示語にある。指示語とは文脈に依存した表現であっ
て、物語的な内容を素材とする和歌で指示語を用いるのは、物語の
文脈、すなわち物語の内容に大きく依存した歌なのであるという。

(上野英二先生「源氏物語における和歌」『成城文芸』二二〇号
昭和六二・七)差し詰め懷円の歌は、その場で語られた王昭君説話
の「物語の文脈」に大きく依存していたのだと考えられるかもしれ
ない。

注意すべきは、懷円の歌が、「鏡」をとりあげることである。王
昭君において「鏡」を詠み込むことは、懷円が初めてというわけ
はなかった。王昭君を題材とする漢詩を繙くならば、「鏡」を詠み

込んだものを見ることができる。

一朝辭龍長沙陌 萬里愁聞行路難
漠地悠悠隨去盡 燕山迢迢猶未殫
青蟲鬢影風吹破 黃月顏粧雪點殘
出塞笛聲腸闋絕 銷紅羅袖淚無乾
高巖猿叫重壇苦 遙嶺鴻飛隴水寒
料識腰圍損昔日 何勞每向鏡中看

〔経国集〕卷十 小野末嗣「奉試、賦得王昭君」

小島憲之氏「上代日本文学与中国文学」下による)

第十二句「何勞每向鏡中看」に「鏡」が詠まれている。

この詩は、本稿第一章で掲げた董思恭「王昭君」によることが指
摘されている(小島氏前掲書)。「行路難」「漢月」「燕山」「鬢影風拂
散」「眉黛雪沾殘」、小野末嗣の詩は、ほとんどそのまま董思恭の詩
に拠る。小野末嗣が「鏡」を詠み込んだのも、董思恭「何勞鏡裏
看」にそのまま倣ったのであった。

さらに董思恭の詩以外にも、『楽府詩集』に収める王昭君詩を見
ると、「鏡」を取り上げた詩を確認できる。王昭君の「鏡」とは、
中国の楽府「王昭君」、六朝詩・唐詩にまで遡り得るのであって、
わが国平安初期漢詩にまで流れ込んだ王昭君におけるモチーフなの
であった。

しかし、それでも未だ、懷円の歌の「かゝらざりせばかゝらまし
やは」の意味は判然としなないと言わざるを得ない。

だが鍵となるのは、やはり「鏡」だろう。果たして、王昭君の

「鏡」は、これ以後、さまざまな理解と展開を生むことになる。

『俊頼髓腦』は前掲の説話のうちに懷円の歌をこう解釈している。かからざりせばと詠めるは、わろからましければたのまざらまし、と詠めるなり。

こんなにも美しくなかったならば、この容貌を頼みにすることもなかったのに（それで胡国に遣わされることもなかったのに）という王昭君の心を詠んだ歌であるとする。「鏡の影」とは、王昭君の美しい容貌なのだ。鏡を見ながら、ひとえに自分の美しさゆえに胡国へ遣わされる運命となつてしまったのだ、そう嘆く王昭君の心なのである。この王昭君には、落胆もなければ、しみじみとあわれに物思う心は感じられない。『俊頼髓腦』の解釈でゆくと、鏡の前で美貌に自惚れている驕慢さ、王昭君の思い上りが、この歌から浮かび上がってくる。

『俊頼髓腦』流の解釈は、次のものにも見られる。

王昭君鏡を見るに形世にすぐれたるをみづからたのみて賄をせず
 （『和歌童蒙抄』 『日本歌学大系』別巻一による）
 さて國に行つきてかゞみをみるに。わろき所もなし。それを題にして。……

これもやう／＼にいふめり。その道の人にたしかに可尋。

（『龍鳴抄』）

一方、『俊頼髓腦』からやや下る『丹後守為忠朝臣家百首』『王昭君』は、次の二首をあげている。

くやしきもかがみのかげをたのみつつちぢのこがねをつくさざ

りける

なげくまにかがみのかげぞかはりゆくこゑにかけるすがたなるらん
 （『新編国歌大観』による）

前の歌は美しさゆえに賄賂をやらなかったことを悔しがる、思ひ上がった王昭君の心で、『俊頼髓腦』の解釈と近い。

後の歌は白楽天の「愁苦辛勤傾頓盡 如今却似畫圖中」（『和漢朗詠集』『王昭君』『日本古典文学大系』による）に拠り、胡国に遣わされたが為に衰えてゆく容色を詠む。「鏡の影」とは、衰えゆく容貌なのだ。それを嘆く王昭君のあわれな心、情緒的な心情である。『俊頼髓腦』における鏡に映る美貌を嘆ずる驕慢さという解釈とは、表裏をなす理解である。

「鏡」の理解に対照的な二つの方向が容認されていたことがわかる。⁽²⁵⁾

第二節

『俊頼髓腦』を記した源俊頼も、次のような歌を残している。
 見えばやなみえばさりともし思ひいづるかがみに身をもかへてけるかな

（『永久四年百首』『王昭君』俊頼 『新編国歌大観』による）

俊頼も、「鏡」と王昭君をむすんだのである。しかし、この俊頼歌と『俊頼髓腦』における懷円歌の解釈とでは、「鏡」の発想が異なっている。

この歌を試解すれば、次のようにならう。

帝の許に残してきた鏡に映りたい。映って私の姿を見せたならば、いくら何でも思い出してくれるだろう、そういう鏡を我が身に替えて置いてきたことだ。

胡国に至り着いたあとの王昭君の心を詠んだ歌である。遠く胡国にやって来てしまったからには、もう生身の姿で帝に見ええることは叶わない。せめて帝の鏡に、自分の面影を映したい。鏡のなかの面影を見たならば、帝はきつと私のことを思い出してくれるだろう。私の身は胡国にある。そんな鏡だけを帝のそばに残して。王昭君は、もう二度と帝に逢うことができない境涯にある。その王昭君が、別れた帝を痛切に恋慕う心の歌なのである。

この「鏡」は、帝の許にある鏡なのだ。王昭君の面影が映る、王昭君の形を見る、文字通り、形見の鏡である。⁽²⁶⁾

これは、遠く隔たった者の面影が鏡に映り留まるのだ、という発想だろう。そうした「鏡」の発想は、次の歌にも見える。

しもつけにまかりける女に、かがみにそへてつかはしける

よみ人しらず

ふたみ山ともにとえねどますかがみそこなる影をたぐへてぞやる

〔後撰和歌集〕巻十九 離別 一二〇七 『新編国歌大観』による)

人と別れるときに、自分の形見として鏡を贈ることが当時行なわれていたようである。

はこのうらにかきつけてつかはしける

おほくほののりよし
身をわくる事のかたさにます鏡影ばかりをぞ君にそへつる

(同右 一三二四)

以上二首『古今和歌六帖』第五「かがみ」に収載
ものへゆく人にかぐみとらずとて

みなれよとそふる鏡の影だにもくもらで過ぐせんわするとも

〔馬内侍集〕『私家集大成』による)

あひかたらふ人の、とをきくにゆくだるに、かぐみをこゝろさすとて、はこのぬいたてに

わかるれどかけをばそへつますかぐみとし月ふともおもひわするな
〔恵慶集〕『私家集大成』による)

いずれも、留まる者から旅ゆく者に詠んだ饒別の歌である。旅立つ者の手元の鏡に自分の姿が留まるのだという。別れてしまったら逢うことはできないけれども、せめて鏡に姿を留め添わせようというのである。

これらの歌から、鏡には人の面影が留まって映るのだ、という通念が根強くあったことが窺える。この発想が、王昭君における「鏡」へと化したのではないだろうか。「見えばやな」の歌は、この、面影が留まる形見の鏡という発想を加え、王昭君の「鏡」に新たな解釈を与えた歌なのである。

見えもせむ見もせん人をあさごにをきてはむかふかぐみとも哉
〔和泉式部集〕『私家集大成』和泉式部による)

女が、鏡に向かう自分の姿を見せたいと言ひ、恋しい人の身を鏡

にしたいと詠む。俊頼の歌の王昭君が「見えばやな」といい、王昭君自身が「かがみに身をもかへてけるかな」と詠じたのに対応する。

「見えばやな」の歌は、帝と別れ胡国に遣わされた後の王昭君の心情である。この一首が王昭君説話のなかで注目しているのは、帝と王昭君が離別した後の話だ。しかも、形見の鏡に託するほどの、王昭君の帝に対する恋慕を歌いあげる。

ここで、『俊頼髄腦』の説話の末尾の、帝が恋しさのあまりに王昭君ゆかりの地に行ってみる、あの場面が想い起こされよう。『俊頼髄腦』は、王昭君と離別したあとの帝の哀しみを語って終わる。まさに物語的な結末であった。が、しかし、帝と別れたあとの王昭君の側までは語らなかった。

「見えばやな」の歌によって、そこにさらに、離別の後の王昭君の心情が物語に付け加わったのだと考えられまいだろうか。『俊頼髄腦』の説話と俊頼歌「見えばやな」をつないでみるならば、さらに新たな物語の構図が浮かび上がってくる。唐土と胡国に遠く隔たった帝と王昭君が、その距離を越えて互いに相手进行い合うという、一对の男女の恋の物語である。王昭君説話は、俊頼の内部では、より心情的な、より物語らしい展開に向かっていった膨らんでいったことになる。

説話のなかの人物の心を推し量って、その心情を詠み込んでゆくという、和歌の表現行為のなかに、新たな物語が萌すのである。王昭君説話は、『俊頼髄腦』を越えて、和歌という表現に逢着し、なおいつそう心情を掘りさげた物語に向かって増益していったのだ。

また、『俊頼髄腦』の王昭君説話だけでは、語りがあるのみであって、和歌を含まない。そこに、源俊頼は、物語の主人公、王昭君になりかわって、和歌を詠み添えたのだとみることもできるだろう。語りに和歌が加わることによって、物語としての形態が整ったのだとみることもできる。

こうして『俊頼髄腦』から和歌を経て、王昭君の物語はまさしく物語として立ち現れてくる。胡国にある王昭君が帝をしのぶ心にまで至らなければ、そしてそれを歌に表出しなければ、源俊頼における王昭君の物語は、物語として完結しなかったのではないか。

第四章 『源氏物語』と王昭君

第一節

「見えばやな」の歌と発想を同じくする歌が、『源氏物語』にある。須磨巻の光源氏と紫の上の贈答である。

自ら須磨への退去を決めた光源氏は、二条院で紫の上と別れを惜しんだ。二条院に訪れた帥宮らと対面しようと、無紋の直衣に身をやつした光源氏は、髪を整えるために鏡に向かう。次にあげるのは、そこでかわされた光源氏と紫の上の贈答の場面である。

御簪かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面瘦せたまへる影の、われながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそ、おとろへにけれ。この影のやうにや瘦せてはべる。あはれなるわがかな」とのたまへば、女君、涙を一目うけて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡の影は離れ
じ
と聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてま
し

柱隠れにの隠れて、涙まぎらはしたまへるさま、なほこら見
るなかにたぐひなかりけり、とおぼし知らるる人の御ありさま
なり。

この唱和もやはり、鏡には人の面影が留まるという考えに基づい
ている。都に留まる紫の上の傍にあって、都を離れゆく光源氏の面
影が留まる鏡、光源氏の「形見の鏡」⁽²⁷⁾なのである。

この場面から須磨巻をさらに読みすすめてゆくと、次の一節に出
会う。

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすぐくな
がめたまひて、琴を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、
大輔、横笛吹きて、遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など
弾きたまへるに、ことのの声どもはやめて、涙をのこひあへ
り。昔、胡の国につかはしけむ女をおぼしやりて、ましていか
なりけむこの世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやり
たらむこと、など思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、
「霜の後の夢」と誦したまふ。

光源氏が流謫の生活を送る須磨にも、冬が訪れた。身にこたえる
淋しさに、光源氏は琴をすさび弾く。

「昔、胡の国につかはしけむ女を」⁽²⁸⁾は王昭君のことで、王昭君に
思い至った光源氏は、「胡角一聲霜後夢 漢宮萬里月前腸」(『和漢
朗詠集』「王昭君」大江朝綱)を誦した。

このように王昭君を引く言辭があることを思えば、同じく須磨巻
にあった光源氏・紫の上の「鏡の影」の唱和と、俊頼の王昭君歌
「見えばやな」とが、形見の鏡という同じ発想によること、あな
がち偶然ではないように思われてくる。

前掲の『後撰集』『馬内侍集』『惠慶集』の例は、旅に去る者の鏡
に面影を添わせる、という歌であった。須磨巻の唱和は、都に残る
紫の上の鏡に面影を留め、光源氏が去ってゆくというのだから、立
場が逆だろう。残された側にある、去った者の形見の鏡という立場
は、俊頼の王昭君「見えばやな」の歌のみに、まさに照応してい
る。

「見えばやな見えざりとも思ひいづるかがみに身をもかへてけ
るかな」を詠んだ源俊頼の脳裏には、『源氏物語』須磨巻が想起さ
れていたのかもしれない。王昭君が帝に残した形見の鏡とは、『源
氏物語』須磨巻の、光源氏が鏡の面影を紫の上のもとに留めるとい
う唱和から、その発想を得ていたのではなかったか。⁽²⁹⁾

再び冬の須磨の場面。「冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけ
しきもことにすぐく」とは、遠隔の地、磨須における、雪降り嵐吹
き荒れる冬の情景である。

光源氏が誦した「胡角一聲霜後夢」は、『和漢朗詠集』「王昭
君」に引く残り三句を合わせて七言律詩一篇をなす。いまそれを補

つて再びあげれば、

翠黛紅顏錦繡粧 泣尋沙塞出家郷
 辺風吹断秋心緒 隴水流添夜淚行
 胡角一聲霜後夢 漢宮萬里月前腸
 昭君若贈黃金路 定是終身奉帝王

「辺風吹断」「霜」といった景物は、須磨の情景に近い。『源氏物語』は、「冬になりて」以下の場面のはじめから、この詩をイメージの下敷きとしていたのかもしれない。

さらに、ここで想起されるべきは、本稿第一章であげた、平安初期『文華秀麗集』に見えた「王昭君」詩の表現であらう。風雪吹き荒れる辺地の描写と、それに辛苦する姿は、王昭君の漢詩における定着したイメージであると考えられた。王昭君が下った胡国は、漢詩の表現では、春のない寒々しい風雪の辺塞であった。

『源氏物語』が、須磨巻のそれまでの物語から季節を一転、「冬になりて」と書き起こし、雪降り荒れる辺地須磨を描く場面設定は、これにも重なる。してみれば、ここで、光源氏には、風雪に辛苦する王昭君が重ねられ、かの謫居の地須磨には、春なき風雪の寒々しい世界という王昭君の胡国の如き漢詩的な辺塞のイメージが下敷きにあると考えることができる。⁽³⁰⁾

つまり、「昔、胡の国につかはしけむ女」が引き合いにだされるのを俟つまでもなく、先に引用した冬の場面の劈頭から、『源氏物語』は王昭君のイメージを下敷きとしているのだと考えるべきだろう。『源氏物語』における王昭君説話の受容は、たんなる引例とい

うだけではなく、もっと広げて検討する必要がある。

光源氏が「琴を弾きすぎ」ぶ姿も、王昭君によるものだろう。「琵琶馬上作楽」「文選」「王明君詞」以来定着していた王昭君と琵琶のイメージから派生して、琴を弾く王昭君が意識されていたことは、『うつは物語』が俊薩女の琴をめぐる王昭君説話を引きあいにだすことから明らかである。⁽³¹⁾「昔、胡の国につかはしけむ女」に、「王昭君が事也。…琴よりおもひ出給ひたる也」と注した『岷江入楚』所引、箋（『源氏物語古注集成』による）の見解は従うべきものだろう。

この冬の須磨の場面における、光源氏の姿には、王昭君が重ねあわせられている。京を離れて須磨に謫居した、という光源氏の境遇は、まさに王昭君の運命に酷似する。『源氏物語』は、光源氏の須磨流謫にあたって、王昭君を下敷きとしているのである。⁽³²⁾

王昭君の先例を思いやった光源氏は、「この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたむこと、など思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて」と思う。あの先例のように、愛しい紫の上を放ちやうて、そのまま氷の別れとなってしまうたら…不吉な思いが、光源氏の心をよぎる。光源氏は、紫の上を王昭君に擬えてみたのだ。愛しい人を遠くに行かせてしまった時のつらさを、そこで思う。この心境は、王昭君を遣わした後彼女を恋う帝の心情に近い。

だがそれ以上に、辺地須磨に遠く下った光源氏の姿には、やはり胡国に下った後の王昭君の境遇が重なるだろう。『源氏物語』はこの場面で、王昭君説話における、帝と別れた後胡国において帝を恋い

慕う王昭君の姿を、光源氏に重ねているのではないか。

ここで『源氏物語』は、王昭君説話のどこに注目しているのか。

それは、帝と王昭君が別れた後の物語に他ならない。そしてそれが、須磨巻、別れてきた紫の上を思ふ光源氏を語る下敷きとされたのである。ここにおいて、『源氏物語』の理解した王昭君説話とは、王昭君と帝が別れて離れ離れになった後の心情を語る恋の物語であったと考えられる⁽³³⁾。

こうした『源氏物語』の理解は、『俊頼髄脳』に和歌を加えて、離別の後に王昭君と帝が思い合うところまで物語が増益していった方向性とまさしく重なる。つまり、『俊頼髄脳』から和歌を経て、説話のなかの人物の心情を掘り下げ、王昭君説話を物語らしい展開へと深めていった過程を、『源氏物語』は、夙に内包していたことになる⁽³⁴⁾。

第二節

月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所は、奥まで限なし。床の上に夜深き空も見ゆ。入りかたの月かけ、すぐく見ゆるに、「ただこれ西に行くなり」とひとりこちたまひて、

いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし

先に引いた冬の須磨の場面は、さらにこう語り続けられている。光源氏が「霜の後の夢」と誦したのにつづいて「月」が叙述される展開は、その詩句「漢宮萬里月前腸」の「月」からの連想である。

ここでもまだ、王昭君のイメージは、『源氏物語』の文脈のなかに揺曳しているのだ。

月によせて、光源氏は我が身の無実を託ち、身の潔白を思う。「ただこれ西に行くなり」は、定家以降、「真筈桂香半旦円 三千世界一周天 天廻玄鑑雲将齊 唯是西行不左遷」(『菅家後集』「代月答」)を注するの⁽³⁵⁾が一般である。無論、それに従うべきであると考えながら、その「月」が王昭君から来たものである以上、月に無実を託つ光源氏の姿を、道真と重ねるだけではなく、王昭君に引き寄せても考えることができるだろう。

王昭君が無実を託つという理解を示すものも、ないわけではなかった。『唐物語』には、王昭君説話が次のような形で載る。

むかし漢の元帝と申御かどおはしましけり。三千人の女御さき⁽³⁶⁾のなかに、王昭君ときこゆるひとなんはなやかなる事はたれにもすぐれ給へりけるを、この人みかどにまちかくむつれつかうまつらば、我らさだめて物の数ならじとあまたの御こゝろにいやましくおぼしけり。この時にえびすの王なりけるものまいりて申さく、三千人までさぶらひあひたまへり女御さき、いづれにてもひとりたまはらんと申に、うへみづから御覧じつくさん事もわづらひありければ、そのかたちをゑにかきて見給に、人のをしへにやありけん、この王昭君のかたちをなん見にくきさまになむうつしたりければ、えびすの王給てよるこびひらけつゝ我くにへぐしかへるに、ふるさとをこふる涙はみちの露にもまさり、なれし人／＼にたちわかれぬるなげきはしげ

きみ山の行す糸はるかなり、かゝるまゝにはたどねをのみなけどもなにかひかはあるべき。

うき世ぞとかつはしる／＼はかなくもかゞみのかげをたのみけるかな

あはれをしらずなさけふかゝらぬ物のふなれども、らうたきすがたにめでかしづきうやまふ事その国のいとなみにもすぎたり。かゝれどもふりにしみやこをたちわかれにしよういまいたるまで、うれへのなみだかはくまもなし。この人はかゞみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとのこゝろのにごれるをしらず。

(池田利夫『唐物語 校本及び総索引』による。濁点を付した)

三千人の女御の嫉妬にあう王昭君とは『長恨歌』からくるものだろうが、当面ここで注目しておきたいのは、「人のをしへにやありけん」と、「この人はかゞみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとのこゝろのにごれるをしらず。」という評語である。王昭君は、姦計にはめられ、絵を醜く画かれた。その事実無根の絵のせい、胡国に下つたのである。「くもりなき」とは、勿論鏡に映る容貌の美しさでもあるが、我が身の潔白である事をたのみにして、ということでもあろう。須磨巻で、光源氏が「雲近く飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ」と、やはり無実の身を「くもりなき」と詠じているのも、ここで思い起されてくる。無実の身を憂う王昭君という王昭君説話の理解は、『唐物語』から『源氏物語』ま

で廻り得るのではないか。

光源氏は「月を見るらむこともはづかし」と、無実の身を月に見られるいたたまれなきを詠じた。かりに月を鏡に見立ててみるならば、鏡に映る無実の我が身を恥ずかしく思う心ということになるだろう。ここに「鏡の影のつらきかな」と嘆いた王昭君の心情が、重なつてくるようにも考えることができようか。

第三節

平安朝において王昭君説話は、説話のなかの人物の心情にまで至り、そこに新たな心情が吹き込まれることによって、物語的な展開を深めていった。その深化の頂点が、『源氏物語』なのであった。

『源氏物語』須磨巻には、王昭君と帝が別れた後の互いに寄せる恋慕の情や、胡国に遣わされた王昭君が無実を託つ思いといった、新たに膨らんだ心情的要素のすべてが内包されていたのである。

だがそれだけでなく、『源氏物語』の『源氏物語』たる所以は、なお他のところにも求められるべきだろう。問題は、王昭君説話の受容における文章上の問題に移る。

先にあげた須磨巻、冬の須磨の場面。風霜降る辺地で、光源氏が琴を弾き、別れた後の王昭君と帝の心を思わせ、そこに月をあしらひ、罪なき身を託させる。王昭君から受容したイメージは、すべて物語のエッセンスになって、『源氏物語』の物語の文章のなかに摂り込まれてしまっている。

「冬になりて雪降り荒れたるころ……」との風雪激しい空模様は、

もはや王昭君の胡国ではなく、光源氏退去の地、須磨における厳しい冬のありさまを語る情景であったし、琴を奏でるのは、行路の王昭君ではなく、流謫の身を憂う主人公光源氏その人に他ならなかった。王昭君から得たイメージは、すべて『源氏物語』の物語の文脈に溶け込んでしまっている。

辺塞に別れた後の王昭君と帝が互いに恋い慕う情もやはり、『源氏物語』にあつては物語の文脈のなかに摂り込まれていった。それは、「この世にわが思ひきこゆる人などをさやうにはなちやらむこと」等の、須磨に遠く別れた光源氏が紫の上を思い遣る心情として語られた。また、王昭君が無実を託つ心情は、須磨にある光源氏が月に我が身の罪なきを憂う和歌「いづかたの」に結ばれた。王昭君説話において膨らんだ心情的要素を、『源氏物語』は、物語の登場人物の心情として、物語のなかの和歌として、表出していたのだ。

王昭君から得た発想は、すべて『源氏物語』の物語の本流に収斂されてゆくのである。物語として膨らみ展開していった王昭君の物語は、すべて『源氏物語』のなかに溶け込んでゆき、『源氏物語』の内に血肉化されたのだと言えるだろう。そしてそこに、須磨巻という新たな物語が産み出されたのであった。⁽³⁸⁾

それを『源氏物語』における表現から見ると、物語のなかに溶け込んだ王昭君のイメージが、『源氏物語』須磨巻の文章（と和歌）から匂うがごとく立ち現れるということになるのである。『源氏物語』によって享受された王昭君説話は、こうして、須磨巻に結実されたのである。

結語

王昭君説話は、まさに『源氏物語』の血となり肉となったのである。漢詩におけるイメージをも摂り込み、また去りし後の王昭君や帝の心情にまで入り込んでゆき、それをたくみに『源氏物語』自身の物語の文脈のなかに溶け込ませてゆく。それが、『源氏物語』における王昭君説話の享受であった。

同じ物語とは言え、『うつつは物語』は『源氏物語』とは対照的である。『うつつは物語』は、説話の人物の心情に深く入り込んで王昭君説話を物語的に深化させてゆくという『源氏物語』や『俊賴髄脳』や和歌がたどった享受とは、無縁のもののようにであった。『うつつは物語』は、『うつつは物語』自身の関心に引き寄せて、王昭君説話を理想的・道徳的に改変していったのである。『うつつは物語』の文脈にあつては、王昭君説話はかく閉ざされていたのであった。従って、表現の形態においても、王昭君説話が『うつつは物語』の物語の文脈に包摂されることはなかった。王昭君説話は、『うつつは物語』の物語の本筋とは関わりなく、一個の説話として挿入されるのみであった。まるでその説話を語ること自体を目的とし、知識として披瀝してゆくような形である。そして、説話を語る文章は、物語の文体としては熟さないものにならざるを得なかった。

『俊賴髄脳』は、物語的な発想によって、別れた後の帝の心情に言い及ぶところまで説話を膨らませていた。文章においても、叙述を豊かに展開させることを果たしていたけれども、それはあくまで

も王昭君の和歌の解説として記された一つの説話であった。

源俊賴は、さらに和歌において、王昭君の形見の鏡を発想し、胡国に至った王昭君のほうを推し量って、帝と王昭君が別れた後の物語をいつそう膨らませていった。『俊賴髓腦』に和歌が加わって、帝と王昭君の離別の物語は完結したのである。

そうした、和歌を伴った王昭君の物語を、表現形態の面で体現しているのが、下る『唐物語』であると言えよう。しかし、『俊賴髓腦』も『唐物語』も、王昭君説話を一篇の説話として記しているばかりであって、そこから新しい物語を産み出していったのだとは言えない。

『源氏物語』は、王昭君から得た発想をすべて摂り込み、須磨巻という新たな物語へと形象した。その須磨巻における、物語の文脈のなかに溶け込んで王昭君説話のイメージが柔らかに漂う文章は、ひととき異彩を放っている。『うつは物語』とも『俊賴髓腦』とも『唐物語』とも、そしてもちろん和歌とも、『源氏物語』は違う表現の道を歩んだのである。『源氏物語』が果たしたような物語の文脈に溶け込ませる王昭君説話の享受とは、後にも先にも、『源氏物語』を描いてなされることがなかった。

漢詩に、和歌に、そして物語に。平安朝において、王昭君説話は広く受け容れられ、展開していった。それが、この『源氏物語』において、一つの到達点に至るのであると考える。

『源氏物語』以後の王昭君説話には、『俊賴髓腦』に王昭君去りし後の帝の心情、『唐物語』に王昭君の無実を託つ思い、といった

情情的要素を見いだすことができた。それはあたかも、王昭君説話が『源氏物語』を越えたその余韻を漂わせているかのようでさえある。

注

- (1) 『源氏物語』の引用は、『新潮日本古典集成』による。
- (2) 『宇津保物語』の引用は、原則として『宇津保物語—本文と索引—』本文篇所収 前田家本によるが、一部表記を改めた。なお翻刻諸本も参照した。巻名も前田本のそれに従う。
- (3) 「王昭君」題は、『千載佳句』に遡る。
- (4) 「王昭君。性調。拍子八。はやき物也。…〔中略〕…この案この日本国には絶たりけるを。これみなみの宮と申ける人のかばかりゆゑしくめでたきものたえんには心うけれど。尺八の譜よりたづねいだされたり。」(『龍鳴抄』『群書類従』による)
- (5) 奈良時代初期以前に伝来、いったん絶えたが、清和天皇の皇子南宮員保親王が再興したといわれる。
(『国史大辞典』『雅楽事典』参照)
- (6) 本稿でとくにとりあげないものでは、『凌雲集』、『江吏部集』、『資実長兼西卿百番詩合』、『新撰朗詠集』、『夫木和歌抄』、『千載和歌集』(巻七離別)、『永久四年百首』、『為忠家初度百首』、『長方集』、『拾遺愚草』、『唯心房集』等。『王昭君』の題ではないが王昭君を素材として用いたものも含めれば、これのみには止まらない。
- (7) 『楽府詩集』巻二十九、卷五十九に王昭君の詩が収められている。
(7) 卷二「青塚」、卷十一「過昭君村」、卷十四「王昭君」、卷十六「昭君怨」
- (8) 「琴歌馬上怨」が王昭君によるとされる。

(9) 楽府題「行路難」と「王昭君」との表現の類縁性がここで指摘でき
る。

(10) 小島憲之氏「漢語のなかの平安佳人——『源氏物語』へ——」(『文学』
五〇巻八号)に、次のように述べられている。

「花もにははぬ里」といえば、中国人と同様に、平安人も絶域不
毛の地を連想する。と同時に、匈奴に骨を埋めた薄幸の美人王昭
君を思い浮べる。……(中略)……
花もない辺境沙場であり、彼等にとっては、詩の世界にみる空想
の世界であった。

同氏「花なき里——平安人のあやの世界——」(『文学史研究』一四号)な
ど参照。

(11) 『俊賴髓』の引用は、便宜『日本古典文学全集』による。

(12) 例えは『源氏物語』若菜下巻の光源氏・夕霧の音楽論など。

(13) 『四部叢刊』所収による。但し、句点は私に付した。

(14) 但し『西京雜記』では絵を画かせたのは帝に召される女性を選ぶた
めで、胡国に遣わす者を決めるためではない。

(15) また、この説話が朱雀帝の口から語られた話であるという側面に着
目すれば、『うつほ物語』の王昭君説話の文章は、口頭で語られた語
りの性格を反映する文章であるとも捉え得るだろう。とすると、

・六人の国母は千何のこがねを贈る、すぐれたる国母は、をのが徳の
あるをたのみて、贈らざりければ、
・劣れる六人はいとよく画きおとして、すぐれたる一人をば、いよい
よ画きまして

という繰り返し表現は、語りの形式として捉えることができようか。

(16) 「七人」という数は何によるものか詳らかにしないが、次のような
用例がある。

唐土にも三千人の后などはおはするやうありけり。このみかどに

は七人までおはするやうあなれど、いまだあらじ、同じ大臣の御
女の二人とだに后にて並びせ給は、おはしまさざりけり。

(『栄花物語』おむがく『日本古典文学大系』による)

その中に楊貴妃ときは、あまりときめきすぎて、かなしきこと
あり。王昭君は父の申すにたがひて胡の国の人となり、上陽人は
楊貴妃にそばめられて、……(中略)……かやうなれば、三千人のか
ひなし。わが国には、七の後こそおはすべけれど、代々に四人ぞ
たちたまふ。

(『大鏡』道長上『日本古典文学全集』所収九大本による)

(17) 「あが君の御徳にこそまかりいでぬれ。仲忠が徳には、さのみこそ
はうれしげなけれ」(内侍督)のように、「徳」とは、恩恵、めぐみ、
おかげの意。ここでは帝からうける恩恵、すなわち帝からうける寵愛
と解される。

(18) 王昭君の絵を画く、という記述がある関連資料を掲げる。

中国側では『西京雜記』、『世説新語』(『四部叢刊』)、『瑤玉集』
(『瑤玉集注釈』)等の説話類。ほか漢詩(『楽府詩集』所収)における
理解。その一方で、『漢書』(元帝紀、匈奴伝)、『後漢書』(南匈奴伝)
等の史書(いずれも中華書局版)、『文選』(『王明君詞』)、『和刻本文選』
(汲古書院) にはない。絵に関する記述は、説話として付与されたエ
ピソードであったと考えられる。

日本では、『俊賴髓』のほか、『和歌童蒙抄』、『奥義抄』、『和歌色
葉』(以上『日本歌学大系』)、『和漢朗詠集永清注』、『連集良材』(『統
々群書類従』)、『増補和歌題林抄』、『和歌・漢詩等における理解。

(19) 『史記』晋世家の「天子無戲言」(『新釈漢文大系』)に拠る。但し、
前田家本は「天子はかとかくす」とする。『和漢朗詠集永清注』には
「君子ハ二言ナキコトニテ、ト、メタマフコトアタハズ。」(『和漢朗
詠集古注釈集成』第三巻 大学堂書店)と見える。

(20)

注(14)に掲げた中国資料参照。なお、胡鳳丹『青塚志』は、王昭君関連資料を集成する。王昭君の墓を題材とする「青塚」詩があるが、その表現は、『俊頼髓脳』のこの一節に直接関連はないと考える。「王昭君変文」には、昭君の死に対する単于の嘆き、漢使の弔問、漢帝と単于の心情のやりとり、漢使が青塚に拜することを記すが、『敦煌変文集』人民文学出版社)、漢帝自らが思いのあまりに王昭君思ひ出の地に行ったのとはまったく趣を異にする。

別れた後に帝が王昭君を恋う発想の参考として、「王昭君昔月前去漢帝恋之嘆夢驚」

(藤原忠通「賦早涼」『本朝無題詩』)

また、『俊頼髓脳』を原拠とするといわれる『今昔物語集』巻十ノ五には、この『俊頼髓脳』とはほぼ同文が記される。

(21)

この末尾の場面に關しては、小峯和明氏「『俊頼髓脳』と中国故事」(『中世文学研究』八号)に、連続する長恨歌説話の表現からの敷衍が指摘される。たしかに表現は類似しており、長恨歌説話から直接類推して付け加わった可能性は高いが、そうであるにしても、付加の方向性が物語的な発想に向かうものであったことに変わりはない。

(22)

『後拾遺和歌集』の引用は、『新日本古典文学大系』による。

なお、この歌は、『新撰朗詠集』、『俊頼髓脳』、『和歌童蒙抄』、『奥義抄』、『和歌色葉』、『龍鳴抄』、『宝物集』、『延慶本平家物語』、『連集良材』、『増補和歌題林抄』等に多数に収載する。諸書・諸本により第一句「みるたびに」、第五句「からざらまし」の異文がある。

(23)

「月のいとおもしろく侍ける夜、来し方行末もありがたきことなど思うたまへて、かちより輔親が六条の家にまかれりけるに……(略)……」

(『後拾遺和歌集』巻十五・八三九 懷円法師)

「懷円法師をぐらにこもりはべりて、ひじりだてし侍りけるころ、十月十日ばかり京に人のもとにはべるとききて」

(『範永集』『新編国歌大観』四四)

「懷円法師みのにくだりてありしに、をはりのあるきにおとせざりしかば、かく」 (同・五四)

「懷円供奉、みのよりのほりて、おとせざりしかば」 (同・九二)

なお父願道済は、長恨歌の連作數十首を残している。

(24) 『楽府詩集』所収の王昭君詩で「鏡」を詠み込んでいるものをあげる。

卷二十九 庾信「王昭君」、董思恭「王昭君」、顧朝陽「王昭君」、武陵王妃「明君詞」、薛道衡「明君詞」

王昭君の漢詩については、なお問題とすべき点が多い。

(25) 『八代集抄』は、懷円の歌に注して、次のように記している。

下句兩説也。かく美色ならずば、かく絵に悪くかくれて、胡国にゆかんやと也。又胡地にて鏡をみて、かくこゝに来ざらまししかば、

かくおとろへましやはと也。 (『八代集全註』による)

なお、右の『八代集抄』後者の解釈のように、胡地に行った王昭君が鏡を見て衰えた容貌を嘆くという発想は、漢詩における董思恭「斟酌紅顔盡 何勞鏡裏看」、小野末嗣「何勞毎向鏡中看」にも通じており、『俊頼髓脳』流の解釈よりもむしろ時代的に遡り得る発想である。だとすると『懷円歌』「かゝらざりせばかゝらましやは」も本来的には、鏡に映る衰えた容貌を嘆く心情を詠んだ可能性が高いのかもしれない。そうした、辺地に連れて行かれた女が鏡に映る衰えた容色を見て嘆くという話は、『大和物語』第五十五段「あさか山かげさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものは」の説話とその発想を同じくする。

(『萬葉集』に下句「あさき心を我が思はなくに」(巻十六・三八〇七))として収め、『大和物語』とは異なる古伝を伝える。

(26) 下つて、謡曲「昭君」には、「鏡には恋しき人の映るなり」(『日本古典文学全集』)との詞章がある。王昭君における形見の鏡の発想が

記された例である。

また、鏡ではないが、「身づからがしき褥に、わが姿をうつしとゞめて、しきたまへ。われ、夢にきたりて、あふべし」(『曾我物語』巻二「王昭君が事」『日本古典文学大系』による)が参考になる。

(27) 『源氏小鏡』は、この唱和をあげ、「かたみの鏡」を連歌寄合の語とする。(桃園文庫蔵「源氏小鏡」『桃園文庫影印叢書』による)

(28) 河内本「王昭君かこの国へゆきけむ」(『源氏物語大成』による)源俊賴の家集『散木奇歌集』には、『源氏物語』の影響がみえる。

例えば、

・このはちる峰のあらしに夢さめて涙もよほす鹿のこあかな(散木集)

吹きまよふ山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな(源氏・若紫)

・なけかしなふな木の山のほととぎす月のでしほに浦づたひして(散木集)

遥かにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦伝ひして(源氏・石明)

(30) 須磨巻にはこのほかに「月」「雁」と辺塞を意識させる景物が繰り返しあらわれる。「胡馬嘶北風嘶 越島巢南枝」(『玉台新詠』巻一 雜詩九首の第三)による光源氏の言「ゆゆしうおぼされぬべけれど、風にあたりては、嘶えぬべければなむ」も見える。「須磨の関」という地理的關係も、国境のあなたの辺塞と重なる。漢詩的な辺塞のイメージと須磨巻との重なりは、さらに検討を要する課題だろう。

(31) 道すがらなくさむやとてひくことをごとに玉をぬくみだかな(永久百首「王昭君・大進」)

あらずのみなりゆくたびの別ぢにてなれしことのねこそかはらね(『千載和歌集』巻七 離別「王昭君のこころをよみ侍りける」右大臣)

(以上「新編国歌大観」による)

(32) 古注以来、光源氏の須磨流謫には、菅原道真、源高明、藤原伊周、在原行平・業平、小野篁、周公旦などが重ねられているが、本稿では王昭君との関連のみを取り上げる。

(33) 総合巻で、前斎宮の入内にあたり「王昭君」が「ことの忌みある」物語とされたのは、まさにこのためであった。

(34) とすると『源氏物語』自らが、須磨巻の別れの場面「形見の鏡」の唱和において王昭君の「鏡」に発想を得ていた可能性もあるいは考えられるかもしれない。

(35) 『奥入』では自筆本、大島本ともに「未勘」(『源氏物語大成』研究資料篇による。『定家小本』に「唯是西行左遷 菅家御作」とあり、『奥入』成立後の定家の追考とされる。

(待井進一氏「『定家小本』翻刻」『源氏物語とその影響 研究と資料』武蔵野書院)

定家以前、『源氏積』は「幾行南去馬 一片西傾之月 赴征路獨行之子旅店猶向泣胡城百戦之師 胡笳未歇」(『源氏物語大成』研究資料篇所収前田家本による)を引く(『和漢朗詠集』晩に収載)。これは定家によって改められたわけだが、『源氏積』の注釈も辺地の月を意識している。(注30参照)

また、この「月」の場面と道真との重なりについては、新聞「美氏「須磨の光源氏と漢詩文」浮雲、日月を蔽ふ」(『甲南大学紀要文学編』七六)に詳しい。

(36) 『唐物語』(底本、尊経閣文庫本)のほか、『今昔物語集』(『日本古典文学大系』底本、鈴鹿本)、『和漢朗詠集永濟注』(『細川家永青文庫蔵「倭漢朗詠抄注」(『細川家永青文庫叢刊』一三三)は「王昭君」と表記する。また「王昭君胡人給てあひくしてもの國へ行むかふことなり」(『源氏積』須磨(前田家本))「王昭君か形を絵師かく事也」

(同宿木)とある。昭・照いずれの表記も行なわれていたとらしい。

また『源氏物語絵巻』絵合(徳川美術館蔵)には、「長根哥わうそ宮
なとやうなるゑは」と記されている。

(37) 『菅家後集』に、次のような詩句がある。

「月光似鏡無明罪 風氣如刀不破愁」(「秋夜」)

『日本古典文学大系』による)

(38) 『長恨歌』『長恨歌伝』を下敷きとして桐壺巻が座まれたのと、こ
は軌を「にすると言えよう。

(成城大学大学院博士課程前期)